

堤防上の道路

津市長 前葉 泰幸



三重大学キャンパスの東側に堤防と一体となった素晴らしい道路が開通して3年が経過しました。

堤防の上を通る道路は幅7.75mが確保され快適に走行できます。海寄りに整備された幅3.5mのゆったりとした歩道は、浜辺の景色を眺めながら散歩やジョギングが楽しめるかと好評です。

この道路は三重県が整備したものです。都市計画道路河芸町島崎町線の県道部分が、国が整備を進める海岸堤防と一体となって施工されたのです。

堤防の最頂部は天端と呼ばれ、その幅は技術的な基準から原則として3m以上であることが求められます。栗真町屋工区では、管理車両や緊急時の水防活動用の車両が通行できるよう、天端幅は5mと設定されていました。しかし、その幅では一般車両が通行する道路としての機能を持たせることはできません。そこで、国の海岸堤防の規格に県が一部事業費を負担して道路分の幅を追加する形で、天端幅11.25mの「堤防兼道路」が実現したのです。



■計画線上を北上中

都市計画道路は、栗真環境公園のところで大きく海寄りにカーブする堤防と分かれ、まっすぐ北へと延びていきます。現在は白塚漁港までの1.9km部分で県道の整備が進められているところですが、それより先、白塚と河芸の漁港間の2.1km部分の道路はすでにできあがっています。昨年春に供用が開始された志登茂川浄化センター建設の際、下水道関連事業として県が幅8mの道路を整備したからです。

■長期未着手区間の現状

問題は河芸の漁港から北、シーサイドタウン河芸までの1.2kmの区間です。未整備のまま県の手で工事が進む見通しが立たない状況のなか、住民は必要に迫られ、対向車のすれ違いが困難な幅4mの旧堤の上を走行しています。危険と隣り合わせの日常に、河芸地域の道路整備を望む声は高まるばかりでした。

■住民が示した打開案

転機は平成29年春に訪れました。この地区で県の海岸堤防の工事が始まることと決定したのでした。

即座に地元自治会が動き出し、河芸町の連合自治会長は、関係する地区の自治会長が名を連ねた要望書を津市に提出しました。その内容は、県が整備に取り掛かる堤防に市が道路を一体施工することを提案するものでした。

県が都市計画道路として河芸町島崎町線の建設を決定したのは昭和48年のことです。年月の経過とともに道路予定地にはびっしりと住宅が立ち並び、計画線上の道路建設は大変な困難を伴うことが予想されます。そこで、自治会は、当初のルートにこだわることなく、河芸地域の堤防に都市計画道路河芸町島崎町線と変わらぬ幹線道路としての機能を持つ市道を建設することを要望したのでした。

■津市の決断

三重大学の東側では、国の堤防に県が道路を一体施工しました。今度は河芸町で、県の堤防に津市が道路の一体施工をする番です。

まずは、財源を確保する必要があります。河芸町島崎町線は旧河芸町と旧津市を結ぶネットワーク型道路であることから、合併特例事業債を充てることが可能だと判断しました。

その上で、堤防の詳細設計に間に合うよう、すぐに県と協議を開始し、平成29年8月、津市が道路部分の経費を負担することで、県は予定していた堤防の天端幅を4.5mから7.5mまで拡幅し「堤防兼道路」を建設することに合意しました。

河芸町中別保樋門から北に向けての海岸堤防工事は今年度中に始まります。中別保樋門の南側から河芸の漁港までの区間も、漁港を管理する県が漁港海岸堤防としての整備事業に着手し、堤防と道路の一体施工の設計に取り掛かっています。

■国土強靱化対策で加速するインフラ整備事業

南海トラフ巨大地震対策として特別な予算を獲得したことに始まった北部海岸堤防の整備と時を同じくして、長年の懸案であった道路問題にも活路を見出すことができたのは、地元の方々の粘り強く息の長い活動の成果にほかなりません。

堤防と道路という重要なインフラを整えて災害に備え、安全・安心な環境を地域の活性化につなげようと努める住民のひたむきな姿勢に呼応するかのよう、政府は、昨年のも未曾有の自然災害を教訓として「防災・減災、国土強靱化のための3か年緊急対策」を閣議決定しました。北部海岸堤防関連の事業にも、この特別な予算が上積みされ、整備事業のさらなるスピードアップが期待されているところではあります。

住民の命を守る堤防に道路としての機能を持たせることで暮らしの利便性も格段に高まります。堤防と道路が一体となった整備事業をしっかりと推進してまいります。